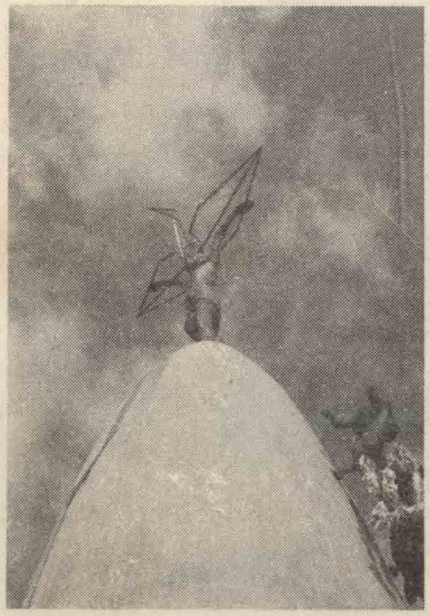
■かえらぬ鶴

瀬戸奈々子
林田みや子
二見書房刊



かえらぬ鶴

瀬戸奈々子
林田みや子

二見書房

昭和36年10月12日　初版発行

© Printed in Japan.

かえらぬ鶴

定価 260円

著者　瀬戸奈々子
　　林田みや子

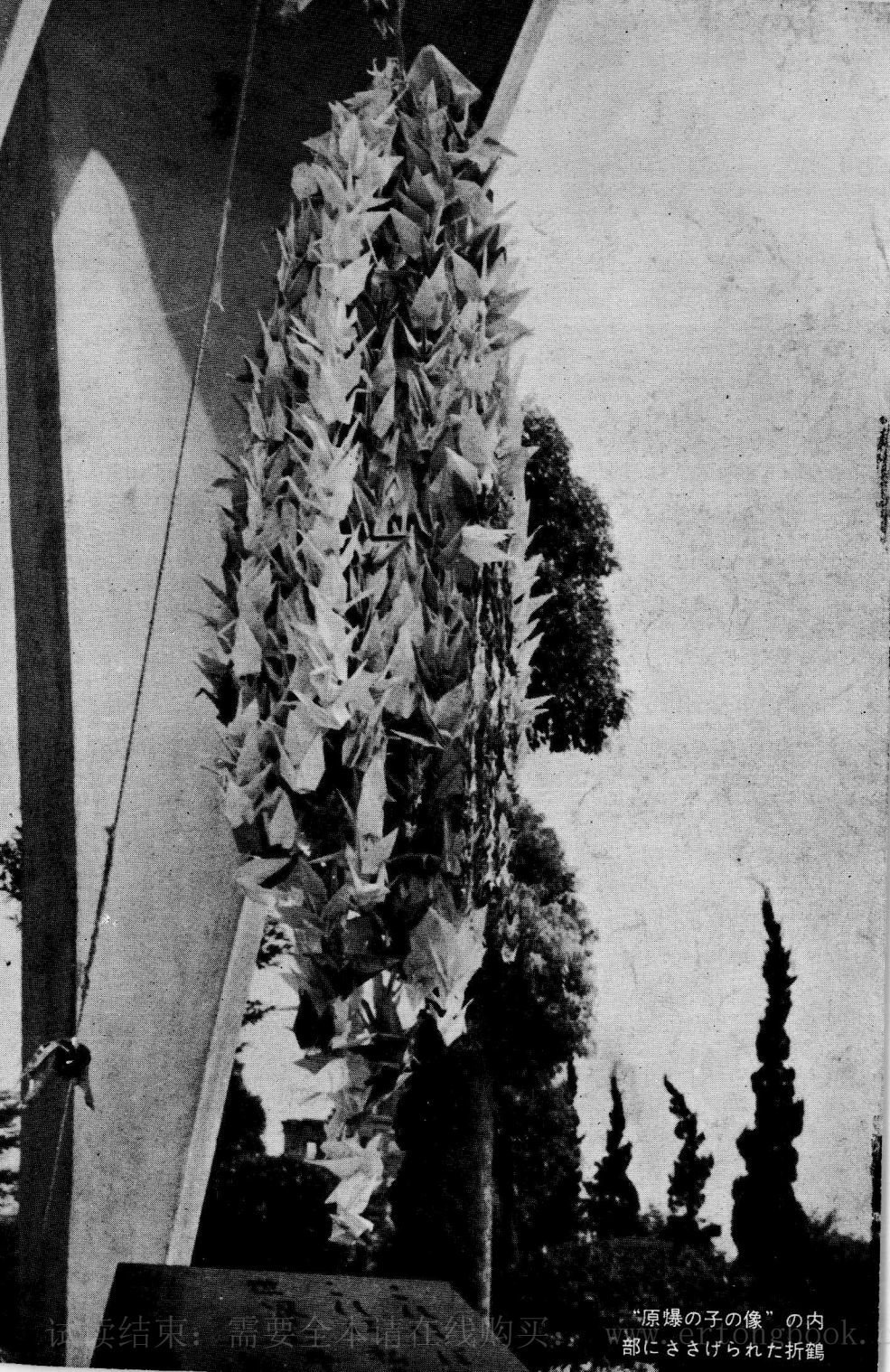
印刷　株式会社堀内印刷所

製本　株式会社徳住製本所

振替　東京 2639番
電話　東京 (332) 6011番
東京都千代田区神田三崎町2ノ26

発行　株式会社 二見書房

太田川の流れに影を落す
原爆ドームと瀬戸奈々子
さんの書いた詩



“原爆の子の像”の内部にささげられた折鶴

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

元気に働いていた頃の瀬戸奈々子さん

原稿執筆中の林田みや子さん

なき母の写真を抱いて
慰霊祭に参列した真美
ちゃん（提供・週刊現代）

残酷な予告の前に……
生きる若き妻の ……
はかない願いをこめて
つづった日記と ……
その母親の愛情で……
えがく涙の手記 ……

序に代えて

厚生大臣　灘尾弘吉

瀬戸奈々子さんと、そのお母さんの林田みや子さんの共著による『かえらぬ鶴』を読んだ。

奈々子さんは、原爆被爆による「骨髄性白血症」で二十七歳の若き命を絶ったひと。みや子さんは、その遺子をかかえて、いまなお原爆被災地の広島に生きるひとである。

原爆の悲惨さを、世界に向かって説けるのは、身を持って被爆を経験した広島、長崎を持つ、わが祖国だけであることは、申すまでもない。

人口四十五万の広島には、いまなお、五人に一人の被爆体験者がいる。

あらゆる職業、あらゆる階層の人びとのなかで、この被爆を受けた人たちも、わが身、

わが命をいとおしみ、平和な生活を願いながら生きているのだ。

先般、私は久振りで故郷広島に帰った。そして原爆病院で、いまなお被爆の苦しみの床につく、多くの人びとに会った。その人たちのことなども回想しながら、そうした人たちをめぐる個々の声の一つとして、私は、この『かえらぬ鶴』を読んだ。そしてはげしい願いをこめた、この若き人妻の苦しみに泣き、死にゆくわが子をみつめる老いた母親の叫びに共感した。文学というものが、日常市井の声を代表するものであるとしたら、これこそ文学の一典型であると思った。しかも、きわめて現代に密着した……。

この奈々子さんの手記は、英訳され、さらにプラウタの記者によって、ソヴェト語にも訳されると聞く。

そうしたことによって、この手記が世界の人びとに知られるとともに、本書がひろく世に読まれることを願うのは、ひとり私だけの感慨ではないと思う。

奈々子さんの冥福を祈り、お母さんの健闘を願いながら、ささやかな一文をはなむけとする。

目次

序に代えて　灘尾弘吉　六
日記（33年12月21日～12月28日）　一五
十二年間の潜伏期　二一
日記（33年1月2日～3月9日）　三七
退院はしたが、再び　四七

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

日記（33年8月25日）　八五
運命の一瞬　八七
日記（33年11月12日～12月27日）　一四七
ヒロシマへの道　一五八
日記（34年1月5日～2月22日）　一七九
かえらぬねがい　一九九
むすびのことば　二一〇
「かえらぬ鶴」によせて　深川宗俊　二二三

カバー装画・水谷光代

あまりにも残酷な
取り返えしのつかぬ現実に
苦しみながらも、私は
生きぬかなければならない

近く終わるであろう事を
察しながら

わたしは少しも気づかなかった。

奈々子がこのような日記ふうの記録を書きのこしていることなど、思いもかけぬことであった。

闘病中はたえがたい苦痛に耐え、つねに右手首に痛みをうったえていた奈々子のことを思うと、いつどのような環境のなかで、これを書きしるしていたのか——不思議にさえ思われる。

このノートがわたしの手にわたされたのは、奈々子が絶望的な時期——死期をあと三十分ほどでむかえようとしているときであった。そのときのわたしは、それがなんであるかも考える余裕はなかった。ただ、わたしはこれを本能的にうけとっていたような気がする。

こうしてわたしの手にのこされた奈々子のノート（中判のノート二冊）を、わたしが心を

落ちつけてはじめてひらいたのは、驟雨（しゅうう）のように通りすぎた、あの悲しい日から数日すぎたある日、うつろな気持のまま、座敷のまんなかにぽつんと座りこんでいたときであった。

その最初のページいっぱいに、この文章がしるされてあった。したがって、日付もなく、いつごろの感想なのか、わたしにははっきりわからないが、筆跡からみると、諦観の世界にかなりふかくはいってからしたためたもののように思われる。そしてこの詩のような感想文こそ、この断続的な日記ふうの記録の内容はもちろん、奈々子自身の精神のすべてを象徴しているように思われてならない。さけえない自分の運命をすなおにうけいれようとする気持と、断ちがたい愛情の絆（きずな）との間で、奈々子が苦しみぬいた最後の人間的な思いを、この数行の文章のなかに結集したものにちがいない、とわたしは信じている。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c